

## アルタクシェール行傳の宗教史的一背景

伊 藤 義 教

パーバクの子アルタクシェールの行傳 (Kārnamak i Artaxšēr i Pāpakān)<sup>①</sup> はサーサーン王朝の開祖アルタクシェール一世以下、シャープフル一世、オーフルマズド一世にまでわたって説き及んではいるが、本書の價值は、史籍としてよりもむしろ、イランの宗教史上に占めるその獨特の地歩にあるというべきであろう。従つて本論もまた、箇中の消息を明らかならしめようとするにほかならない。さて、この行傳に登場する Anōšak-zāt の子 Mtnnk なる人物 (その行跡の一部は pp. 15, 16 参照) についてみるに、Šāhnāmāh<sup>②</sup> では Mihrak となつており、Nöldeke, Bezzenger's Beiträge IV p. 52 ff.<sup>③</sup> もこれに倣つて行傳の形を Mithrak と讀んでいる (これに對し Sanjana, Kn. VI 18 ff.; Noshervān, Kn. § 89 ff. らは Mitrōk と讀むも根據を擧げていない)。しかし Šn. の讀み方が本來の形を伝えぬ場合の多いことは周知のことで、行傳についてはすでに夙く Nöldeke, op. cit. p. 46 n. 2 も Kn. § 61 の Bn'k, Šn. の Tb'k について、後者が單なる分別點の打ち違いによるものではなくして、かかる形に轉訛したのは Šn. 以前のことだろうといつている。これは、Mihrak なる Šn. の讀み方にも拘らず、Mtnnk が他の讀み方を許容しうることを示唆するものであろう。かかる見地から筆者は、Herzfeld, ApI. p. 133 f. がこれを Mahrōk と讀んでいることに讀者の注意を喚起したい。氏はこの讀み方を裏付けるために、Bar Bahlūl ed. Rubens Duval col. 1002 f. にみえるベツレヘムの十二マギ中の Myhrwq bar Hwhm 即ち Mihrōq bar Huvahm を援用している。Marquart, Untersuchungen zur Geschichte von Eran II, p. 13 ff. はかれを Av. Māθravāka (Yt. 13<sub>105</sub>) の轉訛とし、父 Huvahm を Māθravāka の子 Vahmaōōāta と關連があるものとしている。そして同じくシリア語書 The Book of the Bee ed. Wallis Budge chapt. 37 (Marquart, op. cit. p. 9 ff.)

には Zarādušt が Gušnasp 王と Sysn と Mhymd とに説法したことが見えて  
 るから、この Mihrōq を以てザラスシュトラ教徒 Māθravāka の轉訛とする  
 説を妥當なものと認めねばならぬ。けだし、Gušnasp は Vištāspa (ザ教の阿育  
 王)、Sysn はザラスシュトラの使徒 Saēna (Yt. 13<sub>7</sub>; Abdihū i Sagastān 10<sub>2</sub>), Mh-  
 ymd はザラスシュトラの従弟にしてその第一弟子となれる Maiōyōimāha (Yt.  
 13<sub>3</sub>; Y. 51<sub>19</sub>) だからである。少くともこれらの事情は、かのマギ Mihrōq がザ教  
 の使徒たるに値いすることを證するものであり、またそれとともにこの人名が  
 正統派のザ教的權威をもつた聖職者の名として、中世イランの精神界に傳持さ  
 れていたことを證するものであろう。また Māθravāka > Mahrōk > Mihrōq な  
 る移行は、何等の説明を要せずして自明である。

問題はむしろかかる背景をもつ Mahrōk なるものが、敬虔なザ教徒とされる  
 Artaxšer の敵となつていのは何故かというところにある。かかる課題は未だ  
 提起されたこともなく、ApI. l. c. もただ行傳の Mtnnk を Mahrōk と讀んで  
 Av. Māθravāka に溯及させているにすぎない。筆者はこの課題を解く手掛り  
 として、まずアヴェスタに出るかれの爲人を知る必要がある。Yt. 13<sub>105</sub> による  
 と

Sāimuži の子にして aēθrapaiti たり hamiθpaiti たる聖 Māθravāka のフラ  
 ワシをわれらは崇む——かれはいとも多くの極惡にして伽陀を低誦し  
 (+ gāθrō.aθrāvayantān), アシャを毀ちアシャに叛き, アフに叛きラトゥ  
 に叛き(世を)畏怖せしめ, フラワシを忿らしめたるやからを打ち殺した  
 るなり——Ašāva が醸す敵意に對抗せんがために

とある。ザ教系傳統においては aēθrapaiti を以て宗教上の師とみ、更にかかる  
 ④  
 關連を離れての師一般をも意味するに至つてい<sup>④</sup>る。しかるに aēθrapaiti > hērpat  
 は回教傳承においては拜火教義と結びついてあらわれていることが多く、この  
 傾向は Aram. mārē 'iššā „lord of fire” が hērpat と訓ぜられることともよく  
 契合し (Frahang i Pahlavik ed. Junker XIII 2), 以てザ教傳統とは異つた回教傳承の正  
 眞性を知ることが出来よう。この點において興味のあることはバルクの近くに  
 あつたとされる都城 Pangahīr (Yāqūt ed. Wüstenfeld I, 743) で, „五火都” を意味す

るこの名は、Y. 17<sub>11</sub> およびそれを解説せる GrBd. 122<sub>15</sub> ff., 就中その 123<sub>1</sub> に „五種の火創造せられたり” と頭書して Bərəzi.savang 以下の五火を取扱えるものによつて、東イランに榮えていた拜火教義の餘影を伝えるものといつてよい (Hyde, *Historia Religionis veterum Persarum* p. 104 f. にもヘラト近郊の山上に拜火施設のあつたことが暗示されている)。かの aēθrapaiti はかかる拜火教の祭司であつたに相違なく、その職能は Vid. 4<sub>35</sub> の示唆しているように、或る種の祭式文の吟誦、即ち高聲でなく低聲を以てする諷誦を伴うものであつた。そうすると、かかる Māθravāka が討滅した相手のなかに „伽陀を低誦するやから” が含まれていて矛盾を來すのであるが、この矛盾が實は Māθravāka を解明する手掛りとなるのである。この矛盾は後段において解決を與えられるために、そのまま存在すべきものである。従つて „Ašāva が醸す敵意に對抗せんがために” とある文中の Ašāva が、Yt. 8<sub>59</sub> において „伽陀を低誦する Ašāva (Ašāva- asrā-vayaθ.gāθā-)” といわれているのは當然であろう。またこの aēθrapaiti と並出する hamiθpaiti は、Bartholomae, GrIrPh. I 1 § 268, n. 50 や Darmesteter, Ét. Ir. I 92, n. 2, Zend Avesta II 472, n. 159, II 535, n. 205 らのいうように、その前分 hamiθ- は OI. samídh に比せらるべきもので、„Brennholz, la bûche sacrificiale” なるべく、然りとすれば hamiθpaiti も aēθrapaiti とほぼ同義の宗教語とみることが出来よう。さてこそ aēθra- を hamiθ- の語根 Av. id/OI. idh „燃やす” の派生詞とする Darmesteter l. c. の説ある所以であるが、これは Wikander, *Feuerpriester* p. 20. によつても採り上げられ、d:θ:θ の間に方言的交替の見られるところを以て aēθra- の θ を説明しようと企てられた。

ところで Māθravāka を伝える Yt. 13<sub>105</sub> は Yt. 13<sub>133</sub> との間に密接な關係を有している：

Sāma 家の Kərəsāspa——長髪者 (gaūsu) にして棍の持主 (gaōa.vara) たる聖 Kərəsāspa のフラッシをわれらは崇む、豪腕 (uγra bāzu) に對抗せんために、廣大なる前面もち、廣大なる幢幡 (drafša) もち、高き幢幡もち、かざせる幢幡もち、浴血の幢幡携うる軍勢 (haēnā) に (對抗せんがために)、破壊を醸し (世を) 畏怖せしめ、人間を殺し、憐憫の情なき賊徒

(gaḍa) (に對抗せんがために), 賊徒の醸す敵意に對抗せんがためにとある。この § 136 は § 105 と全く同一の構成を有している (Wikander, *Vayu* I p. 108 ff.). 文中, Kərəsāspa の綽稱 gaḍsu (cf. Y. 9.10) は Kṛṣṇa の綽稱 keçava に相應し, gaḍa.vara (cf. Y. 9.10) は同じく Kṛṣṇa の綽稱 gadādhara, gadābhṛt, gadin に相應する。そして OI. keçin は周知のごとく Rudra-Çiva 派の行者 (vrātya) にして, かれらは長髪を一特色となし, その Rudra との関係は極めて古く, R̥gveda X 136, に

Vāyūr asmā ūpāmanthat pināṣṭi smā kunannamā | keçī viśāsya pātreṇa yād  
Rudreṇāpibat sahā ||

とあり, ルドラの崇拜者 keçin のオルギアスチックな一面が活寫されている。この Rudra-Çiva 派の行者 keçin の携える çūla の豫型を成すものこそ, Kṛṣṇa を崇める vrātya たちの gr̥hapati が持つ pratoda なのであつて, この點においてもまた Kṛṣṇa は Rudra と密接な関係にあることがわかるとともに, イランの Kṛṣṇa たる Kərəsāspa も Rudra と無縁でなかつたことが反顯されるであろう。イランにおいては Rudra はその別名 Çarva の對應形 Saurva を以て知られており, それが daēva/deva 神群に屬して貶斥されていることは筆者が他所に觸れたところである (拙稿 „イマと太陽” 東方學論集第三 p. 128)。Kərəsāspa と daēva Saurva との間接的關連を示唆するものの一つは實にかれの名前そのものであると筆者は考えるが故に, 以下にこれが理由を開陳しなければならぬ。

およそ Kərəsāspa が „瘦馬の持主” の義とは今も執拗に主張されているが (Composés p. 159; Mayrhofer p. 262), これは疑わしい。OI. kr̥ça „瘦せたる” に對應すべき Av. <sup>\*</sup>kərəsa は單獨には在證されず, また合成詞においてもその存在は疑問である。kərəsa を以てする合成詞は悉く人名であつて, つぎのごときものである。

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| (1) Kərəsavazda  | (2) Kərəsāni  |
| (3) Kərəsaoz̥šan | (4) Kərəsāspa |

まず (1) Kərəsavazda であるが, かれが Kavi Haosravah に追捕されたことを Yt. 19,7 は次のように傳えているが, そこには單一形 kərəsa も並出しているの

で極めて興味がある。

(榮光その身にあり) ければ Kavi Haosravah はかの kərəsa に (勝てり)  
 ……… mairya たるツラン人 Fraṇrasyan と (その弟) Kərəsavazda とをか  
 れは縛せり……………

とある。ここで最も蓋然性のあるのは、kərəsa と Kərəsavazda の前分との間に語原解説の語戯が存するだろうということである。kərəsa を AirWb. 469 は „Wegelagerer, Strolch” (Yt. 11<sub>6</sub>, 19<sub>17</sub>), 但し語原は不明とし、かの kṛṣa とは別語とみている。また Kərəsavazda は AirWb. 469f. には Kərəsavazdah とあり、その後分に Y. 49<sub>10</sub> の vazdahā (單數具格) と同一の語をみとめて „magere (d. i. geringe) Ausdauer besitzend” の謂なるべしというも (Composés p. 199 も同斷) テキストそのままを受容れ且つ前記 p. 4 に挙げた人名中、(3)と(4)がその後分に動物名を擁している事實との間に調和をはかろうとするならば、ここの後分は vazda として Afg. vāzda „膏”<sup>あぶら</sup>との関連を考えることも出来よう。Av. vazdvar (Y. 31<sub>11</sub>, 68<sub>11</sub>) が nēvakīh „佳美” とパフラヴィー語譯され、更に pīvaratvam と梵語譯されていることは、特に注目されてよい。しかもこの膏が家畜のそれに適用されることは、ヤムの第十誡 (DkM. 298<sub>6-11</sub>) 中に、山羊や羊の „膏づくこと (nzynry’)” を取扱えるに徴して明らかである (DkM. 299<sub>5-7</sub> も参照)。nzynry’ は vazdvarīh と讀んで „膏づくこと” と解するのが最も妥當だろう。残るところは kərəsa と Kərəsavazda の前分とに共通の語義であるが、これをみたく最適のものは IE. \*kar- „堅き” (Pokorny, p. 531 f. — cf. Got. hardus „hard, strong”, Hom. καρύς „strong”) なるべく、ここの kərəsa との関連については、次に取扱うべき Kərəsāni/Kṛṣānu を併せ考えると、むしろ前記 kar- の k̄ 擴張形 kṛk̄- を想定するのが合理的であるように思われる。この考え方が正しければ、kərəsa は本來貶小侮蔑の觀念ではないが、それが mairya 集團の團員そのものかその屬性かを示すに用いられるところから、この集團を摺斥する正統派ザ教によつて貶斥的語義、おそらくは „したたかもの” ほどの謂を賦與されたのではなかろうか。この考え方は Yt. 11<sub>6</sub> や Nīr. §§ 26, 53 (Vaag, Nīrangistūn pp. 50, 65 f. 参照) にもよりよき解釋を與えるであろう。當面の kərəsa に IE. (kerk̄-:) kōrk̄-: kṛk̄- „瘦せ

たる”(Pokorny, p. 581——尤も氏は Av. *kərəsa* をも OI. *kṛṣa* „瘦せたる”とともにこれに屬せしめているが) を擬することは妥當でないのみか、人名 (3) *Kərəsaoyšan* において解決至難な矛盾に逢着するであろう。

つぎの(2) *Kərəsāni* は Y. 9<sub>4</sub> につきのように伝えられている:

Haoma はまことにかれ *Kərəsāni* を王座より引き倒せしが、そ(のクルサー=)は王權欲もて増長し、そは(かく)言いいたりき: „これよりのち、*āθravan*, (聖典の) 講釋を弘むるためにわが國を遊行することなかれ。

(さもなくば) かれは(わが) 榮えのすべてを征服せん、(わが) 榮えのすべてを打滅ぼさん”と。

すなわち、*Kərəsāni* は *āθravan* と對立的立場にあつて、これと相容れない存在である。*āθravan* を有するアヴェスタ句が最後のアヴェスタ編纂に際して挿入されたものであり、決して古いものではないとしても、それは、*āθravan* そのものの古くより存していたことを少しも妨げるものではない。マグバト集團がザラスシュトラ以前の汎アーリヤ的要素をも傳えていたことは、アゼルバイジャンのマギ族が安息王朝時代(またはそれ以前)にアルメニアに媒介した *Vərəθrayna* が最古の汎アーリヤ的神話を想起せしめる形態を保持していることによつて明らかである。メディアの *Vərəθrayna* 神話においてその讃歌を誦していたといわれる詩人を Dinon は *Ἀγγάρις ὁ ποιητής* とよんでいる (Athenaeos, *Dipsosopistae* XIV 33), すなわちメディアの *r̥si* *Aṅgiras* である。*Aṅgiras* が登場するならば、*Atharvaveda* が *Atharvāṅgirasah* とよばれたり、*Veda* において *Atharvan* が *Aṅgiras* と並出したりするのに徴して、メディアに *āθravan* の存していたこと、またそれがながく保持されていたことも想察するに難くなく、マグバト教團がこの古語をもつておのが教團——ヘールパト教團に優位するものとしての自團を詮わすに詮つたとする (Wikander, *Feuerpriester* p. 204; *Der arische Männerbund* p. 78) のは納得出来る。かかる *āθravan*=*magupat* と對立すべき *Kərəsāni* は、*Kərəsavazda* と同じく、*mairya* 集團に屬すべき *kərəsa* でなければならぬ。そして *Kərəsaoyšan*, *Kərəsāspa* に倣つて *Kərəsāni* にもその後分に動物名を擬するとならば、語根 *an-* „呼吸する”またはその派生形を考える立場 (Wikander,

der, Vayu I p. 83 ff.) とは絶縁しなければならぬであろう (Māyrhofer, p. 263 は不可)。この点においても, OI. Kṛçānu の方が啓發的であるように思われる。かれは殊に天界ソーマの守護者として, それが人界に盗み去られんとするのを阻止しようと企てたが (Rg. IV 27, IX 77<sub>2</sub>—cf. Aitareya Br. III 26), さらに重要なことはかれが Açvin (= Nāsatya/Av. Nāohaiθya) の援助をうけたり (Rg. I 112<sub>21</sub>), Rudra (= Çarva/Av. Saurva) と共に喚請されたり (Rg. X 64<sub>8</sub>) していることであつて, これはかれの mairya 的性格を露呈するものであり, その前分 kərəsa- が Kərəsa-vazda のそれと等しいことを知るに足るであろう。そしてその後分 anu には Gr. ὄνος, Lat. asinus „ass” に相等するものを認めて, 最終的にはこれをシュメル語 anšu „ass” に溯及せしむべきであろうか (この ὄνος < anšu については Buck, A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages, p. 172 f. 参照)。然りとすれば Kṛçānu/Kərəsāni は „強驢の持主” の謂となるべく, u/i なる合成詞末音の相違は兩語における嗜好の相違に基づくものであろう。またかかる外語の受容については, Accad. ṭuppu, duppu が OPers. dipi „碑文, 文字” となり, 更にインドに入つて lipi となれる例を参照したい (但しこれには別の考え方もある, 詳細は Messina, L'aramaico antico p. 26 参照)。

つぎに(3) Kərəsaoχšan の場合をみるに, かれは他の諸人物とともに Yt. 13<sub>101</sub> に並擧され, 例のごとく, 聖なるかれら一々のフラワシをわれらは崇めるとある。それらの人物をテキストの順に従つて示すと, つぎの通りである:

- |                          |                 |
|--------------------------|-----------------|
| (a) Zairivairi           | (b) Yuχtavairi  |
| (c) Srīraoχšan           | (d) Kərəsaoχšan |
| (e) Vanāra               | (f) Vīrāz       |
| (g) Nījara (Savah<br>の子) | (h) Būji.sravah |
| (i) Bərəzyaršti          | (j) Tižyaršti   |
| (k) Pərəθvaršti          | (l) Vačzyaršti  |

語義はそれぞれ次の通りである:

- (a) 金色の鎧をもてる (AirWb. 1682),
- (b) 鎧をまとえる (AirWb. 1301),

- (c) 美しき牡牛をもてる (AirWb. 1647),
- (d) *kərəsa* 的牡牛をもてる,
- (e) 勇士を征服せる (<\**vana-nar-a*。短音の連続を避けるために同音省略と *a* の代償延長を伴う—— *Composés* p. 35 f. および p. 198 f.),
- (f) 周圍に君臨せる (*vī-rāz*), または, 戰士に君臨せる (<*vīra-rāza*) (AirWb. 1454),
- (g) 老衰を洗除せる (<\**nīja-ja-a*。 *nīja* については *naēg-* „洗除する”: *Yt.* 8<sub>13</sub> には „こなる一切庶類より一切の怖畏を洗除して [*naēnižaiti*] かれらを治療するもの” とある。 *ja* については, *Av.* *zairina*, *zauruna*, *zaurvan*, *²zarəta*, *a-zarəma* *a-zarəšant* にある \**zar* „老齡” を参照のこと。 \**nīja-ja-a* には同音省略は起るも, 長音 *i* のために代償延長はみられない),
- (h) 救拯者の喚聲裡にあるもの (AirWb. 968),
- (i) 高き槍をもてる (AirWb. 962),
- (j) 尖れる槍をもてる (AirWb. 654),
- (k) 廣き (双ある) 槍をもてる (AirWb. 894),
- (l) 槍を揮うもの (*ApI.* p. 77 f.)。

これらの人名を通覧すると, 名前が順次に二つ宛ほぼ同義または類義の語であることがわかる。そうすると, *kərəsa* を前分とする (d) *Kərəsaoyšan* も (c) *Srīraoyšan* と甚しく異なるかまたは對蹠的なるとき意味ではなく, 従つてその *kərəsa* は *OI.* *kṛṣa* „瘦せたる” ではなくして, 筆者がさきに *kərəsa* ..... *Kərəsavazda* に想定したる „強き, 強大なる” の義ではなかろうか。またこの *Yt.* 13<sub>101</sub> に出る一連の人名は *Vayu* 崇拜に関連をもつていられるように思われる, けだしリスト中 (j) — (l) は *Yt.* 15<sub>48</sub> に *Vayu* がみずから號している名と全く同じであり, (i) さえも *Vayu* の名であつたろうと推定されもするからである。これを別の方面からいうならば, 本來よりすれば正統派ザ教によつて當然排斥さるべき筈の *mairya* 集團には, *kərəsa* を前分とする合成詞名を名乗る人物のいたことが反顯されるわけである。かかる見地よりするも, (4) *Kərəsāspa* は極めて注目される。今や *OI.* *kṛṣācva* が存するにも拘らず, われわれはこれを



„悍馬の持主”の義に解すべきはいうまでもない。この筆者の立場ともよく調和するものは Herzfeld, *Zoroaster and his World* p. 704 の立場である (cf. ApI. p. 204 f.)。氏によれば *Āθwya θraētaona* の傳説と *θrita* の子 *Kərəsāspa* のそれとは, *Trita Āptya* ザーゲというより古い神話の, イランにおける二異形であるというのである。しかもパルティア的 *θraētaona* の方が *Kərəsāspa* よりも廣い基底を有するものと考えられる, というのは Herodotos IV 5-6 にスクーチャ族最初の王 *Targitaos* の三子中, 末子 *Kolaxais* より王族スクーチャ族が出ているとある *Scolotoi* 族の物語は, *θraētaona* の三子中, 末子 *Ērič* がイラン人の祖となつていっているというイランのザーゲと同じであり, スクーチャの *Targitaos* はイランの *θraētaona* だからである。この両者が „三重に強きもの”であるとすれば, 筆者の理解する *Kərəsāspa* に語義上からも最も近いものといえるであろう。

*Kərəsāspa* は *θrita* を父とし *Urvāχšaya* を兄弟として生れたが (V. 9<sub>10</sub>), 生地について示唆に富むものは Vid. 1<sub>9, 10</sub> であろう。Vid. 1<sub>10</sub> にみえる *Ahura Mazdāh* 所造の „多くの牧地を擁する *Urvā*” は Yt. 19<sub>3</sub> にみえる „多くの牧地を擁する *Urvaōā*” (*Sistān* の *Hamūn* 湖に注ぐ河川中の一) に比定すべきもので, ヘラトの西南に當る地域であろう (Christensen, *Le Premier Chapitre du Vendidad* p. 33 f.; Herzfeld, *Zoroaster and his World* p. 759 f.)。 *Urvā* と *Urvaōā* とについては Kay Us が Av. *Usan* と *Usaōan* なる二形を有していることを参照したい。この地域に王たるべき運命にあるものとして *Urvā* の王なる語義をもてるものこそ, 實に *Kərəsāspa* の兄弟 *Urvāχšaya* である。この地域の東北につらなる *Kābul* の溪谷は Vid. 1<sub>9</sub> において *Kərəsāspa* と結びつける地域である, 即ち Vid. 1<sub>9</sub> によると *Ahura Mazdāh* が *Vaēkərəta* 地方を創造したところ, *Aōra Mainyu* は對抗的に *Xnāθaitī pairikā* をつくり, それが *Kərəsāspa* に付憑したとあり, パフラヴィー語譯は *Vaēkərəta* を端的に *Kāpul* と譯している。*Vaēkərəta* が „*Vayu* の創造したるもの”の謂たるはいうまでもなく, これをカーブルに比定する Pahl. Vid. および GrBd. 206<sub>13-14</sub> (ここでは更に *Kāvulistān* と註されている) の立場は, この地域を占めたクシャーナ王朝の貨幣に *Vayu* の別形 *Vāta* を刻し

たもののあることによつて裏付けられる (Christensen, op. cit. p. 30)。Vaēkərəta 卽 Kāpul と Kərəsāspa との関係は、かれが Yt. 15<sub>20-21</sub> にて Vayu に供犠していることや (cf. Yt. 5<sub>37</sub>), かれが Kāpul の hērpāt として, Ōhrmazd の子たる火 (ātaγš) を殺し (Pahlavi Rivāyat accomp. Dāstān i dēnik 65ff.) 或いは傷つけたるも (DKM. 802 f.), 懺悔贖罪して赦されたとあることによつても立證される, 卽ち Māθravāka が aēθrapaiti であつた (Yt. 13<sub>105</sub>) ように, Kərəsāspa もこの點において拜火教義と関係のあつた hērpāt < aēθrapaiti であることが明らかとなろう。

上來取扱える Kərəsāspa の爲人の一面は、本來かれが Rudra=Çarva / Av. Saurva 崇拜の mairya であるか乃至は Vayu 崇拜のそれであるか、或いはそれらに近い存在であるかするとともに、拜火教義とも関連し祭文を低誦する aēθrapaiti をも兼ねていたのであろう。そして Vayu 教團乃至 Vayu 天の性格は殊に Yt. 15<sub>4</sub> にその一面を描出されているので、これを Yt. 13<sub>130</sub> と對比するときは、Kərəsāspa が本來屬していた人的結合から正統派ザ教團に受容されるとともに、かつてのかれの教胞より來到するおそれのある諸災厄に對し、これを禳う墻壁としてそのフラワシが崇められていることがわかる (Wikander, Vayu I p. 108 ff.)。またこのことは Yt. 13<sub>130</sub> と同じ構成をもつ Yt. 13<sub>105</sub> における Māθravāka にも適用することが出來よう、卽ちかれにおいても、aēθrapaiti として祭文の低誦を一職能ともしていたかれは、従つて本來からすれば „Ašāva によりて醸される敵意” (Yt. 13<sub>105</sub>) と對立的にあるのではなくして、その Ašāva こそ伽陀を吟誦するものとして (先掲 Yt. 8<sub>39</sub>) かれと等しく aēθrapaiti であつたと解せらるべきものであり、かくして Māθravāka もまた本來の教胞から引き離されてかれ一人のみザ教團に受容され、Kərəsāspa と等しい取扱いをうけたのである。ここに見られるかれら兩者の関係を、筆者は更に別の角度より追究しなければならぬ (Widengren, Harlekintracht und Mönchskutte……// Orientalia Suecana II 2/4, p. 90 ff. 参照)。

まず以て重要なことは Kərəsāspa の家名 Sāma の語義であるが、それはその異形 \*syāma (山名 Syāmaka 中にある) とともに „黑色” を意味するものとされている。Sāma が Arachosia にいた θαυραῖοι 族 (古代ペルシア語形!) の名

であつても、このことを何ら妨げるものではない。さきに取り扱つた印度の *Kṛasāspa* たる *Kṛṣṇa* も同義であつて、その通俗語原說的解明は周知のように *Mahābhārata* や *Bhāgavata Purāṇa* に試みられている。この *Kṛṣṇa* の黒色の義はこれまたさきに觸れた *Rudra* と関係するもので、*Aitareya Brāhmaṇa* V 14 と註によれば、そこに登場する „暗色の衣をまとえる人” とは *Rudra* のこととされている。*Rudra-Śiva* 派の *vrātya* たちの *gr̥hapati* が暗色の衣服を着している (*Lāṭyāyana Śrauta Sūtra* VIII 6<sub>1</sub> と註参照) のは、かれらの *vrātapati* たる *Rudra* (*Kātyāyana Śr. Sūtra* XXV 5<sub>1</sub> と註; *Ācvarāyana Śr. Sūtra* II 12<sub>o</sub> と註) のまとえるこの暗色の衣服に倣うものであろう。ところで、この黒色または暗色の系統は *Kṛasāspa* 以外に *Yt.* 13 に登場する或る種の人名にも見られるのである。これについて筆者の特に指摘したいことは、*Yt.* 13 の傾向が實在または神話傳説上の人物を擧げてそのフラッシを崇めるといふにとどまらず、古い祭式供犠上の職能能目をも擬人化して同様のことを試みているということである (*Vendryes, MSL.* XX 273; *Nyberg, Religionen des alten Iran* p. 178 c. n. 2; *Wikander, Der ar. Männerb.* p. 83 f.)。この見地からすれば、必要の前には或る程度いかなる固有名詞の創造も不可能ではなかつたであろう。そこでまず *Māṇravāka* (*Yt.* 13<sub>105</sub>) をみるに、その父は *Sāimuži* とよばれているが、これは等しく色彩名を前分として構成され、單數屬格においてのみ在證される一連の合成詞形人名中の一つであり、それらを列擧すれば次の通りである (單數屬格): *Sāimužōiš*, *Sāyuždrōiš*, *Syāvaspōiš*, *Daw-rāmaēšōiš*, *Avāraoštrōiš* である。いずれも *AirWb.* のごとく *i* に終る女性詞を後分とするものではなくして、*a* に終る男性詞を後分としそれが合成詞的 *i* を附加されたものである (*miθra* → *aiwi.miθri* のごとし。Frisk, *Zur indoiranischen und griechischen Nominalbildung* p. 62 — 上掲人名については *Composés* p. 32 f. 参照)。それ故に後分は單一詞としてはそれぞれ <sup>⑥</sup>*muža-*, *uždra-*, *aspa-*, *maēša-*, *uštra-* でなければならぬ。就中、最初の二語についていうと、その前分 *sāi*, *sāy* は *AirWb.* 1569 ff.; *Composés* pp. 19, 32 f.; *Pokorny* p. 582 などに反して、むしろ *IE. kīē*, *kī-* に屬せしめるべきものとする。この語根は „暗灰色” を意味し各種の語形を派生させているが (*Pokorny* p. 541), それらは決して黒一色ではなくし

て、暗色を基調としたニュアンスに富める色合である。殊にイラン語の借用とみられる Arm. *seav* (cf. Av. *syāva*) が黒色のみか、暗色をも意味していることは興味がある。さてこの語根よりの派生詞 Av. \**syāma* (先掲) に對し同義語 Av. *sāma-* が併存するのに準じ、Av. *syāva* に對し \**sāva* を想定することは可能であろう。そして *Syāv-aspi* に倣つて \**Sāv-muži*, \**Sāv-uždri* を考えれば、その *v* は次に來る唇音 (*m*, *u*) との間に異化作用を起してそれぞれ *Sāimuži*, *Sāy-uždri* となるべく、或いは \**sāvu* をそのまま用いても \**sāvu* > \**sā(v)u* > \**sāu* となり、その *u* と次に來る唇音 (*m*, *u*) との間には同様の異化作用が起るから結果は全く同じである。そうすると、*Māḍravāka* の父も „暗色の驢をもつもの (*Sāimuži*)” として色調においては、*Kərəsāspa* の家名 *Sāma* や *Kṛṣṇa* のみならず、*Rudra* やこれを *vrātapati* と仰ぐ *vrātya* たちの *gr̥hapati* の服色とも通ずることがわかる。<sup>⑨</sup>

然らば、これらの人物に縁りのある „暗色” とはいかなる性格をもつものであるかというに、まず以てそれが祭司階級の色でないことは註4に明した通りであるが、これに肯定的一解答を與えるものこそ GrB1. 32<sub>1-4</sub> で、それによると暗色の衣服が農牧階級のものであることがわかる。*Kərəsāspa* (*Sāma* 家の出なるが故に、/) や *Kṛṣṇa* も、この點に關する限り、農牧階級と至大な關連をもつのであつて、またそれはかれらがいずれも梃 (*Av. gaḍā/Ol. gadā*) の持主とされている (上説 p. 4) ことともよく契合する、けだし梃棒は防衛權なき農牧階級者が容易に入手しうる武器だからである。そしてこの武器はインド・イラン文化圏においては特殊なつながりを以て、その所持者を端的に第二階級 (戰士階級) に押し上げるとともに、この戰士集團の統率者を王者にのし上げているのである。終末の日に *Kərəsāspa* がよつて以て *Dahāka* を討つべき *gaḍā* を稱して *Dātastān i dēnīk 37<sub>17</sub>* は *gat i gāvsār* „牛梃” といつて第三階級と第二階級との連關を示し、或いは *Kṛṣṇa* が遁竄中牧夫の間で成長し (*Mahābhārata*, *Bhāgavata Purāṇa*), *Kūruš* (Cyrus) にも同様のことが傳えられ (Herodotos), その他 *Sāsān*, *Šāhpuhr*, *Ohrmazd* (いずれも行傳, *Šn.*), *Fārīdūn* (< *Frētūn* < *Θραῖταῖνα* --- *Šn.*; *Thā'alibi* ed. *Zotenberg* p. 31) などにも類似のここのあるのは、兩階級の密接なつな

がりを示唆するものでなければならぬ。

イランにおいてはこのことは、第三階級が兵力供給の源泉となつて完全自由な貴族即ち本來の戰士階級に對し、壓倒的な量的比重を以て戰士集團の形成に寄與していた事實に基づくものとみるべく、この際封建制下にあるこの半自由な農牧者は、貴族を人的結合の統率者とし相合して一つの戰士集團を構成しているわけである。イランにおける、いわば國民皆兵制ともよばれるべきこの制度は、筆者によれば、Aṣyātkār i Zarērān § 24 にこれを伺うことも出来るように思われる：

國に<sup>の</sup>宣れよ遞騎に宣れよ、アナーヒターとワフラム火とを崇めて守るべきマギ<sup>びと</sup>人のほかは、十歳より六十歳に至るまでは、何ん人たりともおのが家にとどまるべからず、と。

Vištāsp 王がザラスシュトラの教えに改宗したのを怒りその信仰放棄を迫る Arjāsp 王を邀え討つために、Vištāsp 王の下した大動員令中の一節である。舞臺はザ教の開創をめぐる宗教戦争ではあるが、その精神なり制度なりは安息朝盛時のものであり、Yašt 諸書に斷片的に伝えられる古英雄敘事詩と Šāhnāmāh にみられるそれとをつなぐ中間楔子である。OPers. kārā が „Heer” であるとともに „Volk” であつたり、アフラ神 Miθra が軍神であるとともに農牧神であるのもこの間の事情による。最後の場合については東方學論集第三 pp. 127-126 所載の拙稿を參照されたく、またミスラの車には vazra は一本なるも、容易に入手し得且つ多數化を建前とする毘 (gaḍā) に至つては實に千本も積載されていることを注意したい (Yt. 10.11f.)。この第二階級と第三階級との或る一面における熔融は、Kṛṣṇa やイランのかれたる Kərəsāspa において農牧者的な面と戰士階級的英雄としての面とが兼具されている所以を釋去するものであるが、筆者はこの連關において今一度さきに觸れた ḡula について述べねばならぬ。Kṛṣṇa を崇める gr̥hapati のもつ pratoda と本質的には同一のものたる Rudra-Śiva 派の keçin が携えているこの ḡula は Av. suvrā に相等するが、この suvrā とは aštrā (OI. aštrā „鞭”) とともに „よき畜群をもつイマ (Yima hvāŋwa)” が Ahura Mazdāh より授けられ、よつて以て大地を擴張せる牧畜具

にして武器たるものである (Vid. 2<sub>6</sub>, 10<sub>7</sub>, 11<sub>7</sub>, 18)。hvāθwa, suwrā, aštrā はいずれも帝王イマのよつて立つ基盤が第三階級たることを暗示するとともに、イマの榮光が Vārəgan 鳥の姿で飛び去つたとき三度目に Kərəsāspa によつて捕捉されたとある點に一つの解決——イマを帝王とし同じく第三階級を基盤として立つ英雄 Kərəsāspa をその戰士集團の統率者とみることによつて——を與えたとともに、Kərəsāspa の戰士的性格をも反顯するものでなければならぬ。

筆者はさきに Māθravāka の宗教史的背景が Kərəsāspa のそれと同一または類似のものであることを見て來たが、今やここに Māθravāka の父 Sāimuži と Kərəsāspa の家名 Sāma とにみられる語義 „暗色” より出發してそれが農牧兵集團の色 (象徴的) であることを知るとともに、かかる集團の員子としての Kərəsāspa の戰士的性格を明らかにするに至つた。従つてわれわれは Māθravāka に對しても、Kərəsāspa の持つかかる性格の何程かを頌つことを許されるのではなからうか。推測を逞しくすれば、„マンスラを誦するもの” たる Māθravāka とは hērpat としての Kərəsāspa の一面であるかも知れないのである。„暗色” または „黑色” という色調に集約せるこれらの階級的 (第三階級)、宗教・社會的ならびに地縁的 (東イラン) 諸關係は、別の觀點から考察してもまた肯定されるように思われる。

ザラスシュトラはガーサー教團において driyu „貧者” を以てかれ自身およびその教團員を詮わしているが、その否定形たる OI. adhrigu は本筋としては純戰士階級たる Indra とそれを取巻く戰士集團 Marut (本來は第三階級なるも) とを示している (Wikander, Der ar. Männerb. p. 50 ff.; Widengren, op. cit. p. 58. ff., p. 96, n. 2)。ザラスシュトラはみずから zaotar (OI. hotar) とよんでいるが (Y. 33<sub>4</sub>), そのことは、東イランにおけるかれのガーサー教團中に第三階級出身の弟子が多數いただろうことと少しも矛盾しない。しかのみならず、OI. adhrigu が Indra と Marut とをあらわしていることから察すると、Av. driyu が第三階級を——しかも宗教・社會的な意味において——あらわしていただろうことは、前ザラスシュトラ的現象<sup>⑦</sup>ということが出來よう。換言すれば、印度と密接な宗教・社會的關係にある東イランの第三階級は古い拜火教團の一基盤でもありととも、

特殊な關連において戰士集團の長をも支えていたのであろう。

以上詳細にわたつて取扱つた Yt. 13 の Māḍravāka を行傳の Mahrōk と比較すると、前者が敬虔なザ教徒たるに對し後者は敬虔なザ教徒 Artaxšēr 一世に敵對していることがわかれるとともに、この間の矛盾を解くために行傳の宗教史的地位如何という課題に直面しなければならない。

行傳が傾向としてマグパト (maguṣat — 以下 M. と略記) 系ザラスシュトラ教的であることは、社會階級を擧げるに際し moṣumart „マギ人” を首位において自派を示していることによつて明らかであり (§ 10), この點は、尙おヘルパト (hērpat — 以下 H. と略記) 系たるを失わぬ Artāi Vīrāz Nāmak (AVN.) が XIV<sup>(6)</sup> (K 20 folio 9 v. 1. 9 ff.) において H., Artēštār (戰士), M., Vāstryōšān (農牧者), Hutuxšagān (商工者) の順に擧げ、或いは I<sub>1</sub> (K 20 缺) にても H. が M. に優位し III<sub>1</sub> (K 20 f. 4 r. 1. 17—f. 4 v. 1. 3) は II. を首位におくも M. を擧げていない點と對照的である。AVN. の M. 教團に對する批判は I<sub>11</sub> (K 20 f. 2 r. 1. 12—14) によくあらわれている。就中、行傳のこの性格は Kirm 王または Haftānbōxt に對する取扱い方に最も強く伺われ、不寛容となれる M. 教團の面目躍如たるものがあるのである。

行傳によると——Artaxšēr が Kurd 族を討つて鹵獲品を Pārs に運ぶ途中、Kirm 王の Haftānbōxt の軍勢がこれを掠取して居城 Gōzihrān に拉し去つた。Artaxšēr はこの uzdēs (§ 79) を討たんとして却て Haftānbōxt が伏兵のために敗績し、再度攻めてまた成らず、かくするうちに今度は Pārs は Zn'm の Mahrōk が Artaxšēr を襲うたのである (§ 89)。Artaxšēr は Gōzihrān 城より軍を撤し單騎逃れてさる二兄弟の家に到つたところ、かれらはこの uzdēs を呪い、uzdēs-parastakān を勝利者たらしめた惡靈を呪うのみか (98), さらに慰めていうには„……焦心焦慮し給うなかれ、何となれば Ohrmazd と Amahraspand 諸神はこれが策を求め給うて、この惡魔 (Kirm 王) をしてこの儘にさし許し給うことはないからである、というのは、Dahāk とツランの I'rāsiyāk および蕐林の亞歷山が權勢を以てして猶お且つ神はこれをよしとし給わずして……これ

を隠没不顯ならしめ給うたからである”(101)と。Artaxšēr はかれらの獻策を容れてこれを倒すに先立ち、かの Mahrōk を弑し(109)、やがて二人を伴い遠國ホラッサン人に扮して Gōzihrān 城に到り宮仕えを願い出た。uzdēs-parastakān (111) はかれらを參入させたが、Artaxšēr は城外に兵を伏せ、Kirm 王が毎日のしきたりに従つてかれのすすめる牛と羊との血を呑まんとして開口するや、間髪を入れず、熔鑛をその口中に注いだ(117)。Kirm は二つに裂け(119)城内は大混亂に陥り、城外の伏兵は合圖の狼煙をみて馳せ參じ大殺戮を加えた。Artaxšēr はかの城を破却し……セフラム火をその地に安置した(122)——とある。

Kirm 王が Azi Dahāka に擬せられていることはいうまでもなく、その魔的存在たることは § 101 のみならず、§ 119 によつても明らかである。けだし AVN. I<sub>7</sub> (一部は K 20 缺……K 20 f. 2 r. 1. 3) にも亞歷山の末路を敘して

かれはイラン國の……Hērpat らと Magupat ら……を多數弑し……イラン國の貴族と小王らをして相互に怨憎と不和のなかに投じ、みずからは裂けて地獄に奔れり

とあるからである。行傳も端的に亞歷山をもつて Azi Dahāka および Fraoras-yan と同列にしている。行傳のこのキルム王討伐が印歐神話における龍討伐のモチーフとともに、熔鑛を以てする神盟裁判の思想 (GrBd. 225 f.; AVN. I<sub>10</sub>=K 20 f. 2 r. 1. 9—12 等參照) を含んでいることはいうまでもなく、この後者の思想は後説亞歷山譚にも龍討伐に依用されている。しかのみならず、Kirm 王は uzdēs、その廷臣は uzdēs-parastakān „uzdēs 奉仕者” とよばれている。uzdēs は正統派ザ教團よりみた異教的偶像をさし、その祠堂 uzdēs-čār / -tačar は特に var i Cēcast (Šīz/Ganzaka) のそれを指すのが殆んど例となつている。また行傳は Vahrām Gōr 時代の成立とみられる大マグバト職 (magupatān magupat) を以て時代錯誤を犯し Artaxšēr 一世の君側にあつて常時輔弼の責に任ぜしめているが、これまた行傳がマグバト系のものであることを證するものである。

しかるに、行傳はかかる反面において、カノンとしての書きつけられた聖典は全く關知していない。なるほど亞歷山への呪咀を以て Artaxšēr を慰めてお



り、この點においてもかれをザ敎的戰士としてはいるが、亞歷山による聖典燒却などのことは全然記していない。しかのみならず、すべての事物が Pārs 中心に觀察され、首都としてはただ Staḡr (§ 2) のみを知り、Farnbaḡ 火の祠堂を最も重要な聖所としている (§ 66)。AVN. I<sub>11,16</sub> (K 20 f. 2 r. 1. 16—17; f. 2 v. 1. 4—6) は公會を同じ火の祠堂に召集しており、しかもそこに集うものは dēn-dast̄ḡar にして、Šīz 系のものたるマグパトは見えぬ (I<sub>11,ff.</sub>)、また Vīrāz の靈が靈界を遍歴する七日七夜の間その榻側に侍していた人々のなかには、なるほど (1) māzdēsnaḡ, (2) dēn-dast̄ḡarān, (3) hērpātān, (4) magupātān (II<sub>19</sub>=K 20 f. 4 r. 1. 5—7) があるとして magupat を擧げてはいるが、Vīrāz の靈が斯界に還歸せるを祝福せし人々のなかには、或いは(1)と(2) (III<sub>1</sub>=K 20 f. 4 r. 1. 12—13)、或いは(3)と(2) (III<sub>6</sub>=K 20 f. 4 r. 1. 17—f. 4 v. 1. 3) を擧げるのみで(4)は終に擧示していないので、II<sub>19</sub>の(4) magupātān が原本にあつたかどうか疑わしい。また I<sub>12</sub> (K 20 f. 2 r. 1. 15—16) においてすでにマギ人 (magūgmart) は dast̄ḡar i dēn とは流派を異にする旨が明示されているのである。しかし AVN. は Apastāk と Zand とに言及している (I<sub>6</sub>=K 20 欠; II<sub>17</sub>=K 20 f. 3 v. 1. 20—f. 4 r. 1. 3) 點において、DkM. 405 f. や ibid. 411 ff. (GrBd. 214) と同じ M. 系統の傳統をとりいれてはいるが、前記のように Pārs 中心、H. 系統のものを基盤としていることは否みがたく、これに照して行傳を顧るならば、Wikander, Feuerpriester p. 133 ff. のいうように、行傳が M. 系統の要素を含みつつも、H. 傳統、Pārs 傳統或いは Staḡr 傳統に屬するものであることは否み得ない。換言すれば、行傳においては M. 系ザ敎化が未だ頂點に達してはいないのである。もしこれが徹底化しているならば、デーンカルトやブンダヒシュンに見られるごとき體裁をとつたことであろう、即ち行傳の冒頭において

蕤林の亞歷山が歿後イラン國には 240 (GrBd. 214<sub>13</sub>: 90) の小王ありき (§ 1) ということにとどまらず、すすんでかれが焚書の罪を呪咀したことであろう (§ 191 參照—そこには M. 化がよくあらわれている)。およそ正統派ザ敎の傳統がイラン傳承のすべてでないことは、前者によつて怨憎の的とされる亞歷山譚 (Pseudo-Callisthenes の作をパフラヴィー語に

て改作せるもの。七世紀の成立にかかり、シリア語譯で傳存：E. A. Wallis Budge, *The History of Alexander the Great*) においては、ダリウスの娘 Roxane と婚しその後繼者として登場しているのみか、歿後イラン人はこれを Mišra 神として崇めようとしていることによつても明らかであり、或いはまた歴史的佛陀が Vid. 19<sub>1, 2, 43</sub> においては惡魔 Būiti として登場し、GrBd. 186<sub>11-12</sub> には „惡魔・佛<sup>ぶつ</sup> (But) は印度において人々の崇むるものにして、かれの像のなかには菩薩 (Bōdāsaf) として崇めらるる精靈やどりてあり” といい、或いは Aβyātkār i Žāmāspik VIII 6 には „支那は大國なり……そこに住する人々は……佛<sup>ぶつ</sup>を崇め、死するときは魔徒となる” とあるに拘らず、Bōdāsaf Nāmak (菩薩記) や Balauhar u Bōdāsaf (バラウハルと菩薩) 等においてはかかる取扱いの行われていないことによつても明らかであろう。<sup>⑩</sup>

このように行傳においてはマグパト化がその窮局にまで及んでおらず、Staγr 傳統が尙お強く脈搏つていることは kai < Av. kavi 稱號の獨特点の使用にもこれを知ることが出来る (Wikander, op. cit. p. 165 ff.)。行傳 § 42 に

かれ (Artaxšēr) 來りて、二人の女の坐しおるを見たり、かの女ら高叫をなして曰く、 „おそるる勿れ、Sāsān 家に屬し Dārāi 王より出で給う御身、パーパクの子なるカイ・アルタクシェールよ……”

とある。Artaxšēr は kai を冠稱され、その系譜はサーサーンを通じてダリウスに還歸するもそれ以上には溯つていない。このことは行傳 § 3 にてサーサーンの祖がダリウスの子ダリウス (Dārāi i Dārāyān) にとどまつているのと同じである。Pārs に局限せる諸傳承は Dārāi と Vištāsp をして一大役割を演じさせるのを特色としており、Tabarī, *Annales* ed. de Goeje I 868 f. の傳える Mihr Narsē の場合もその祖先中に二ダリウスと Vištāsp とを有している。そしてこの系統の諸傳承においては Avesta 的 kavi とのつながりはどこにも求められない。しかるにマグパト傳統に屬する系譜作製においては、例えば GrBd. 232<sub>10-12</sub> のように、サーサーン王朝を Avesta 的 kavi に溯らせているのである。周知のごとく、この kavi はマグパト・アヴェスタでは Kavāta 以下八人に限られているが、この kavi につながりをもたぬ Artaxšēr——ハカーマニシュ朝の

垂統とされ、自身また同王朝の王名 Artaxšāra を名乗るかれに kai 稱號を冠している行傳の態度は、マグバト・アヴェスタの影響を受けぬ、より古い Pārs 傳統の特色を示すものである。ここに至つて、行傳の宗教史的地位は今やきわめて明瞭となつた。

そこで筆者は、行傳の Artaxšēr を史上のかれと對比しなければならぬ。行傳のかれが敬虔な正統派ザ教徒とされていることは引例するまでもない。またデーシカルトはかれが分散していた文書 (nipēk) を結集し Tansar をしてそれを Apastāk と合併せしめ、原本を Šīz に置いて謄本を流布させたとか、Tansar と共に宗教上の傳承を再び恢興したとか傳えている。これらの記事の眞の性格は Wikander, op. cit. p. 134 ff. によつて明らかにされた、それによれば M. 教團が H. 教團の傳承を吸収しておのが上に移し、その刪定によつて多くのイランの古英雄譚が排除され或いは改編され、はじめて文字によつて固定された、これ Apastāk に對し對立的に nipēk(ihā) なる語が使用されている所以である、そしてその際 H. 傳承上の諸英雄を M. 系ザ教の英雄に擬制し、恣意的に聖典護持の役を引きうけさせたというのである。事實、われわれ當面の問題にとつて重要な Artaxšēr について正統派ザ教以外の典據をみるに、かれが敬虔なザ教徒たるを證するものはなにもなく、むしろかれが殺伐なアナーヒター教徒であることを傳えている。かれの祖父 Sāsān にしてからがすでに Staxr のアナーヒート祠堂のヘールバトであつたといわれているように (Tabari I 814)、この王朝は最初期以來斯神崇拜と密接な關係にあり、Artaxšēr 一世も熱心な女神崇拜者にして敵の頭を該神殿に吊したり (Tabari I 819)、吊すことを誓つたりしている (Tabari I 818)。それ故に M. 傳統が H. 傳承 (東イラン乃至 Pārs 傳承) を自派のなかに吸収するに及び、Artaxšēr 一世をかの Kərəsāspa や Māḍravāka のごとき正統派ザ教の宗教戰士としたことは明らかである。しかも行傳のこのザ教化はさきにも種々の事情を擧げて指摘したように、その頂點に及んでいるものではない。そこには古い Staxr 傳承——マグバト化を免れた古イラン傳承——が少からず露呈されている。それ故に筆者は、マグバトの刪定を免れた Māḍravāka が本來の姿において、即ち古い東イランの拜火教的英雄として、

Mahrōk の名において行傳に登場していると主張することを許されるであろう。しかもここに Artaxšēr と Mahrōk とを併せ考えると、本來はともに正統派ザ教と對立する古い拜火教徒でありながら、そのうちの Artaxšēr のみを自派に引き入れて Mahrōk と對立せしめる行傳のあり方は、かの Yt. 13 において Kərəsāspa や Māθravāka を自派に引き入れてそれぞれの人物のかつての教胞者と對立させたやり方と軌を一にするものといえるであろう。そしてそれとともに、論じ去つてここに到れば、この行傳の反ザ教的 Mahrōk が GrBd. 231<sub>11-13</sub> において、Manuščihr の孫、Nōtar の子として Mašvāk なる Pāzand 形にて登場し Uzaβ の遠祖となつている所以は、もはや説明を用いずして明らかであろう。

最後に、行傳 § 89 によると Mahrōk は Pārs の Zn'm にいたことがわかり、Šn. はこの地名の對應形として Ğahram を擧げている。行傳の形は Zrahm なるべく、またそれが東イラン方言であることも明らかである。これについては Zranka > Zrang (東イラン方言) / Drangiana (パール方言) を参照すれば十分であるが、さらに GrBd. 228<sub>9-11</sub> を参照するも興味がある、即ちそれによると、Yam とその妹 Yamak より一組の男女が生れ、互いに妻となり夫となつて男は Āspikān, 女は Zryšnm といつたとある。Āspikān (Av. Āθwya / Ol. Āptya [先掲] から派生した家名) は措いて、女名の方をみるに、これは (1) Zarišom か、(2) \*Zr'nm 即ち Zrahom であろう。(1) は \*Zaršom の轉訛なるべく、(2) は \*Zraham を介して \*Zrahm に溯るものであろう。さらに \*Zaršom は Zrahom の音位轉換形 \*Zarhom とその異形として考えられる \*Zāšom (pahrom: pāšom 参照) との習合形とみることが出来る。いずれにしても行傳の Zrahm と同じものであることは否定出来ぬ(地名と人名との別を論外とすれば)。東イランと特別な関係にある Yam (Av. Yima / Ol. Yama) に斯名の一女があるのは、Zrahm にいたとされる Mahrōk (< Av. Māθravāka) が東イラン——そこには古い傳統を誇る拜火教義が榮えていた——に發祥せることを暗示するものというべく、この點よりするも Ğāmšīd (< Yamšēt) が Farnbay 火——古い傳統をもつ Pārs のヘールバトの火——の崇拜者とされていることは興味あることといわねばならぬ (Hau '1-

Faqih, Bibl. Geogr. Arab. V 246; Mas'ūdi, Murūğ IV 75)。

註

(1) Kn. または行傳と略記。§ は Noshervān 本による。

(2) Šn. と略記。その他、學界慣用の略記號以外に注意すべきものは：

AirWb.: Bartholomae, Altiranisches Wörterbuch;

ApL.: Herzfeld, Altpersische Inschriften;

Composés: Duchesne-Guillemin: Les Composés de l'Avesta;

DkM.: Dēnkart ed. by Madan;

GrBd.: Bundahišn ed. by Anklesaria;

Mayrhofer: Mayrhofer, Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen;

Pokorny: Pokorny, Indogermanisches etymologisches Wörterbuch.

(3) 東京大學辻直四郎教授藏。教授の好意を特記して謝意を表したい。

(4) 例せば Vid. 4<sub>15</sub> や Y. 65<sub>9</sub> は前者を, Bahman Yašt 3<sub>27</sub> は後者を示している。この Bah. Yt. においては黒貂の裘をまとえる弟子 (hāvišt) 百五十人を引具する Pišiyōdan は師であり, しかも GrBd. 31<sub>8-9</sub> や DkM. 204<sub>16-17</sub> によれば祭司階級の服は白色とあるから, ここの黒衣が非祭司階級のものたるは明らかであり, その師もおそらくは同断であるだろう。

(5) Av. muža と, 本来より „驢” そのものをあらわすものとされる Lat. mūlus, Gr. dial. μυλός (Hesych.) 等々 (Buck, op. cit. p. 173 参照) との関係, 或いは Mysia (小亜細亞) 産の驢の謂 (mūs-los—Herzfeld, Zoroaster and his World p. 560 c. n. 15) としての Lat. mūlus 等々との関係は不明なるも, おそらくは驢のごときものを意味するのであろう。註(6)参照。

(6) ここで注目すべきは aēθrapaiti 兼 hamiθpaiti たる Māθravāka は, その父の名 Sāimuži を介して Muža に関連をもつかにみえる。Yt. 13<sub>125</sub> によると

Muža 國の Muža 人なる, Parō.dasma が子聖 Dāstāyāni のフラワシをわれらは崇むとある。Muža 國の Muža 人 (Mužahe Mužayā daiōhūš) なる表現は, そのなかに實在のもの (例えば小アジアの Mysia; イランの \*mučiya=OPers. mučiya) をさぐる試みを徒勞に歸せしめるのではなかろうか。人名 Dāstāyāni が OI. āhitāgnī と同じ構成を有して „火の崇拜儀軌をさだめ護持するもの” (Wikander, Der ar. Männerb. p. 77 ff.) を意味することは重要である。Muža を通して Sāimuži の子 Māθravāka とつらなるかにみえる Dāstāyāni もまた拜火教義と関連を有するのである。そして dāsta を前分とするただ二つの人名中の今一つのものたる Dāstāyāni をみるに, Yt. 19<sub>11</sub> には Kərəsāspəm……yō janat humavascā Dāstāyānōiš „ダーシュタヤーニの子らを殺したるクルサーズバを” とあり, daēva 語 humu (OI. sūnu) によつて Dāstāyāni の mairya 的性格を明らかにしているところから推測すると, 同じ前分をもつ Dāstāyāni も本来はアグニなる火の古名をもつ拜火教團の團員たりしものをザ教に吸収して, かの Māθravāka や Kərəsāspa に對すると同じ待遇を與えたものであるかもしれない。

(7) おなじく東イランに屬する方言たるソグド語の ārywš(k) がパーリ語 bhikkhu (OI. bhikṣu < bhikṣate: OI. bhaj / Av. bag „頒つ, 授ける”) の譯語として用いられているのもこの遺産である

(Widengren, op. cit. p. 59 c. nn. 1, 2)。

(8) 章・節の分ち方は Jamasp Asa 本による。

(9) 菩薩記は Nihāyatu 'l-irab の著者が Ilmu 'l-Moqaffa' によつて紹介しているが (Browne, JRAS. 1900 p. 216 f.), それによると

安息朝王 Farrax'ān (非歴史的) の若き王子 Bōdāsaf (歴史的佛陀を意味する) は厭世隱遁の心や  
 みがたく、かれと父王と臣下との間にこれをめぐつて論議が交わされ、寓話譬喩がさかんに援用  
 される。ついに王子は説得されて一王女と婚し、父王の歿後王位を繼ぐ。夫妻は高齢に及んで一  
 子を儲けたが、これが安息王朝最後の王 Ardavān である

というのである。

バラウハルと菩薩は、かの有名なバルラアムとヨーサバト物語の典拠をなすもので、解説するま  
 でもない。この物語の直接的典拠は散逸したパフラヴィー語本のシリア語譯 (これは今に傳存す)  
 である。もちろん、アラブ語譯も存する (Kitābu 'l-Fihrist 119<sub>1</sub>)。このほか Fihrist l.c. の前には  
 Kitābu 'l-Budd (佛陀の書) なるものが載つており、内容の紹介はないがマダバト系統のものでない  
 ことは推察出来る。